

59. つなぐもの ～祭礼地域の日常の姿～

04168074 三木 康嵩
指導教員 市川 尚紀 講師

屋台蔵 ボロノイ分割 共有領域 シデ竹

1. 設計主旨

古くから人々は神を祀る儀式として、豊作や大漁・商売繁盛・疫病退散・無病息災・家内安全等を祈願する目的で、多くの「祭り」を生み出してきた。その祭りは住民同士の強い関係を生み出し、日常空間にも多大な影響を与えることのできるものである。しかし、時代の変化と共にその祭りの目的が娯楽へと変わってきたことで、祭りが持つ本来の性質が失われ始めている。また、プライバシーに敏感な社会が、閉鎖的な住宅たちを生み出してきた。それにより、祭りを支える人々（以下氏子と記す）の関係が希薄になり、日常の風景が寂寞化している地域も少なくない。

本計画では、祭りが持つ要素を取り込み、その性質を持った新たなコミュニティ空間を提案する。それは氏子をつなぐ場として、新たなアイデンティティとなると共に、祭礼地域の日常の本来あるべき姿や祭りの存在意義を氏子に気付かせることを目的とする。そしてそれは、都市における人々の関係性をつくり出す新たなカタチを生むきっかけになるのではないだろうか。

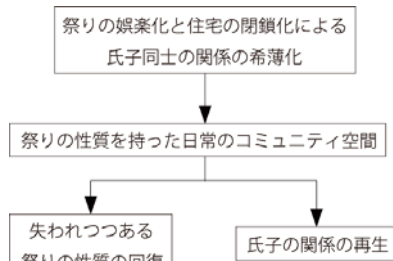


図1 コンセプトダイアグラム

2. 計画地概要

兵庫県姫路市の南東部地域に位置する灘地区を計画地とする。姫路市は、全国的にも最も祭りの多い都市のひとつであり、一年を通して各地で祭りが行われている。中でもこの地区で行われる灘のけんか祭りは、金銀で装飾された屋台の豪快な練りや、激しくぶつかり合う御輿、色とりどりのシデ竹などで有名で、毎年十数万人の人々が訪れ異様な光景が広がる。

(1) 祭礼地域

灘祭りの氏子である東山・八家・木場・宇佐崎・中村・松原・妻鹿の7つの地域が祭礼地域となっており、各地域それぞれに、屋台を納めるための屋台蔵が存在する。

祭礼時や祭りの準備期間に入ると、その周囲に存在する空間では、屋台練りや太鼓の練習などが行われ、住民の多くが場所性を感じる。

(2) 社会環境

灘祭りを中心として存在する地域であり、灘祭りの歴史も長いため、古い町並みが見える地域である。迷路のように入り組んだ細い道路や路地が多い住宅密集地であるが、日常風景は閑散としており、祭礼時とは雲泥の差である。

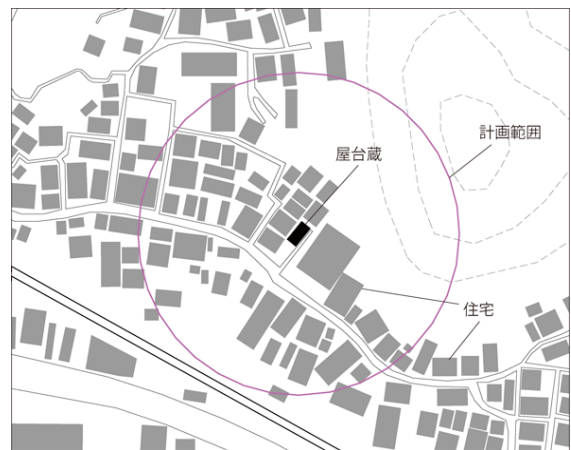


図2 計画地配置図（八家）

3. 計画内容

3.1 敷地境界の再定義

計画地に存在する住宅それぞれの領域を次の3つのルールで再定義する。

(1) 必要な要素以外の排除

屋台蔵・既存の住宅・周辺の自然環境以外の、敷地境界線とそれを表現する塀、既存の道路をすべて排除する。住宅を覆っているものを排除することで、可能な限り開放させる。

(2) ボロノイ分割

住宅の重心を母点としたボロノイ分割により、敷地境界を新たに定義する。母点同士の中線の集合であるボロノイ境界は、住宅の自然な隣接関係を定義することが可能で、住宅地における関係性を正す。また、住宅の重心に母点を置くことで、住宅内部に入り込むような境界線が発生する。明確に領域を分割しながらも、一部の領域が重なることで、より自由な敷地境界が生まれる。

(3) 境界点上の住宅

ボロノイ点上の住宅は排除し、そのボリュームを竹で組んだフレームで形作る。再定義した境界線とフレームで生まれる内部には、祭りの要素を取り込んだ空間を計画する。

3.2 集団のプライバシーを生む共有領域

現代の都市においてその存在価値が弱まってしまった集団のプライバシーを、共有領域となる空間を与えることで形成させる。それにより、住宅の開放化とプライバシー確保の好循環が生まれ、より強い住民間の関係を生み出せる環境になると考える。

(1) パーゴラで生まれる共有回廊

再定義した境界線上に、竹で組んだパーゴラを配置する。パーゴラが表現する微かな境界性は、空間を分けながら、しかし、つながっている事を感じさせる。この曖昧な境界は、氏子同士の適切な距離と関係性を生み出し、日常の中でよりアクティブな活動が可能となると考える。また、この境界線が地域の新たな回廊として、氏子の新たな動線を表現すると共に、映し出された影により、地域に時間による変化をもたらす事が可能となる。

(2) 収納ギャラリーという新たな屋台蔵

フレーム化された住宅内部には、領域内に竹で囲まれた空間を計画する。そこは、屋台を彩る装飾品を納める空間であると同時に、住民の収納スペースとしても提供する。祭りの伝統や技術に触れる場でありながら、己という存在を隣人に表現すると共に、隣人という存在を知ることのできるギャラリーとなる。この共有領域はもう一つの屋台蔵として存在する。

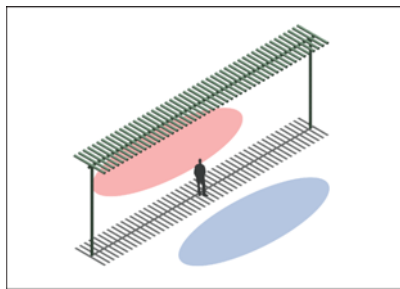


図3 境界を表現するパーゴラ

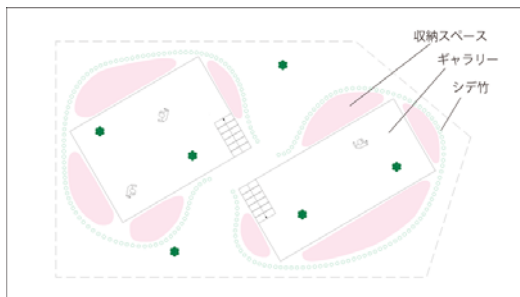


図4 収納ギャラリー平面

3.3 祭りの要素の取り込み

(1) 屋台蔵という中心

上記の空間は、すべて屋台蔵を中心とした範囲に計画する。屋台蔵の持つ場所性を核とすることで、すべての空間に一体感を持たせると共に、より強い祭りとのつながりを持つ空間であることを表現する。また、屋台蔵と共有領域が互いの存在価値を高め合う相乗効果をねらいとする。

(2) シデ竹の有効活用

祭りで使用されたシデ竹により共有領域を形成する。祭りが終わると処分されていた竹を有効活用することで、その竹に生まれた祭りの歴史を地域に残すことが可能となる。そして、その作業はすべて住民の手で行われ、何十年と掛けて地域全体を覆ってゆく。その年月が、より強い住民間のつながりをつくる事が期待できる。



図5 広がっていく共有領域 (八家)

4. 総括

灘祭りの祭礼地域に、2つの共有領域を持った新たなコミュニティ空間を設計した。パーゴラで表現された曖昧な敷地境界は、住宅の適切な関係をつくと共に、住民同士のアクティブな活動が可能となる共有回廊となる。また、シデ竹で囲まれた収納ギャラリーは、日常の中で祭りという文化に触れながら、住民が互いに自己を表現し公開し合えるもう一つの屋台蔵であり、集団のプライバシーを形成する空間となる。それらすべての空間が、屋台蔵の持つ場所性を核としてつながることで、この地域における祭りの存在意義を氏子に気付かせる空間となったと考える。

長い年月を掛けて祭礼地域全体に広がっていくコミュニティ空間が、祭礼地域の本来あるべき日常の姿を取り戻すと共に、この灘祭りという文化・歴史を未来へとより長くつないでゆく。そしてそれが、私自身が感じている祭りの消失という危機感を無くすものとなることを期待する。

建築概要

所在地：兵庫県姫路市飾磨区 主要用途：収納・ギャラリー 構造：竹造・RC造 規模：1階建て 敷地面積：8.8ha